

今宵、彼は紳士の仮面を外す

Hina & Sousuke

結祈みのり

Minori Yuuki



エタニティ文庫

目次

今宵、彼は紳士の仮面を外す

5

書き下ろし番外編
永遠の誓い

327

今宵、彼は紳士の仮面を外す

プロローグ

「お疲れ様でした、失礼します」
週に一度のノー残業デーの水曜日、朝来陽菜は終業時刻ぴったりに席を立ち、エレベーターホールに急ぐ。

到着したエレベーターにさっと乗り込み、ちらりと腕時計に視線を落とす。
午後五時三分。

(これなら、間に合いそう)

毎週水曜日。それは陽菜にとって特別な日だ。

バス通勤の彼女は、会社最寄りのバス停に立つと、やって来たバスに足取りも軽く乗った。

二月半なかばの柔らかい夕暮れの中、一つ先のバス停にバスが停車する。すぐに陽菜と同じような仕事終わりの男女や学生たちが乗り込んできた。

毎日、変わらない光景。でも水曜日だけは、違う。

——あの人だ。

OLに次いでスーツ姿の若い男性が現れる。

その人を見つけた瞬間、バッグを握る陽菜の手にきゅつと力がこもった。

男性の年齢はおそらく二十代前半。新社会人ではなさそうだが、二十八歳の陽菜よりは年下だろう。

柔らかな黒髪に茶色がかったアーモンド色の目。形の良い眉も、すつと通った鼻筋も、驚くほど整っている。その上、彼を取り巻く雰囲気は柔かい。

優しいような顔立ちだから、というのはいさつとある。

でも陽菜は、名前も年齢も知らないその人が、見た目だけではなく中身もとても優しい人だということを知っていた。

彼は、入り口付近の空あいていた席に座ると、バッグから取り出した文庫本を読み始める。けれど、次のバス停に到着する少し前に本をしまう。そして扉が開く直前に立ち上がり、さりげなく席を空けるのだ。

空あいたその席に座るのは、決まって大きくお腹の膨ふくらんだ女性だった。

今日も彼女は、愛おしいとそうに両手をお腹に添えて、バスに揺られる。

そして先ほどまでその席に座っていた彼は、何事もなかったように立っていた。

——初めは、偶然だと思った。

しかし、二回、三回と同じことが続き、彼のその行動が意図的なものと察する。彼の親切をきつと女性は知らない。そんなさりげない気遣いが素敵だと陽菜は思っていた。

彼に会えるのは水曜日この時間のバスだけ……

だから、水曜日は陽菜にとって特別な日なのだった。

1

『あんたほど見た目と中身にギャップがある女は、いないわよね。ある意味詐欺よ、詐欺。男に訴えられないように気を付けなさい』

それは、陽菜の親友、佐倉胡桃の言である。

詐欺なんてとんでもないと思うものの、陽菜は何も言い返すことができなかった。

たしかに陽菜は、名前こそ可憐だけれど、お世辞にも可愛らしい外見はしていない。

中高とバレーボール部に所属していたせいか、身長は百七センチと女性にしては随分と高めだ。ヒールを履けば男性の背を越してしまうこともしばしばある。週の半分はジムに通っているため、体に女性的な柔らかさがほとんどない。

さらに目鼻立ちがはっきりしているほうなので、世間一般では美人の部類に入るとも言われるが、かなり「キツイ」見た目だ。

ならばせめて、雰囲気だけでも柔らかくできないだろうか、と、大学入学を機に初めてメイクを試し、「ゆるふわ系」を目指した。けれど、『あんたに可愛い系は似合わない』と胡桃に一刀両断されてしまったのだ。

代わりにと、ファッションセンスに優れた彼女は、陽菜に「綺麗系」メイクを教えてくれた。髪は一度も染めたことがなく、肩のあたりで切りそろえている。

以来、陽菜の見た目が「可愛らしく」なったことは一度もない。

——そんな中、「女王様事件」が起こった。

大学一年生の時、陽菜は学園祭のミスコンにエントリーしてしまったのだ。

自分の知らないところで申し込まれたため一度は辞退したのだが、先輩たちの「どうしても！」というお願いコールに負けて参加した。

綺麗な人ばかりエントリーされているし、すぐに落ちるだろうと気楽に考えていた陽菜は順調に選考を通過してしまう。そして、決勝戦の審査項目に「コスプレ」があったのだ。なんでも、候補者に一番似合うであろう衣装を事前投票で決定したという。

陽菜に用意されていた衣装は、真つ黒なボンテージコスチュームと鞭、そしてピンヒールだった。上半身は、体にぴったりとフィットするレザー素材のノースリーブ。下半身

は、同じくレザー素材のホットパンツに網タイツ。

そう、俗にいう「女王様コスプレ」である。

(こんな……こんな衣装、着られるはずないじゃない！)

しかしミスコン決勝戦をドタキャンする勇氣は、陽菜にはなかった。

——その結果、まさかの優勝。

生来のキツめな顔と、このミスコンの相乗効果で、陽菜の大学でのあだ名は「女王様」に決まってしまったのだ。

以降、告白してくる男性は増えたが、彼らは陽菜に対して一様に同じ願望を抱いている。

『朝来さんはしっかりしているし、頼りになりそう』

『あなたについていきます！』

『自分を叱ってくれませんか？』

草食系男子ならぬ、調教されたい系男子が殺到したのだ。

けれど、陽菜が派手なのは見た目だけ。当然、彼らの告白には応えられない。

しかしそれが一年以上続き、いい加減陽菜はあきらめた。

もしかしたら、実際の自分を知っても好きだと言ってくれる人もいるかもしれない。

そう思った陽菜は、大学三年生の時に初めて告白を受け入れた。

そしてたったの三か月で『思っていたような人じゃなかった』という理由で、あつさ

り振られてしまったのだ。

それ以降も寄ってくる男性は皆、似たり寄ったりだった。

就職をきっかけにイメージ脱却を図るものの、失敗。陽菜は今なお「従属系男子告白数」を更新中なのだ。



「あ、朝来陽菜さん、僕と付き合っていただけませんか!？」

ある週の水曜日。いつもならバスに揺られているはずの陽菜は、突然の告白に固まった。ほんの三十分前、浮かれて帰ろうとしていたところを、取引先の人間に突然呼び出されたのだ。

「……田中さん、どうして私なのでしょううか?」

「朝来さんならきくと、僕のことを調教……じゃなくてええと、引つ張っていつてくれると思ったからです!」

調教。確かに今、そう聞こえた。しかしそれに触れるのはさすがに怖い。

「引つ張る……ですか?」

そう聞くと、取引先の営業である田中は「はい!」と意気揚々と返事をする。

「朝来さんはしつかりしているというか、遅^{たくま}しいというか、仕事をご一緒^{たくま}していて本当に頼りになる方なので……ああ、もちろん見た目が遅^{たくま}しいという意味じゃありませんよ！」

もじもじと照れながら俯^{うつむ}く田中を前に、陽菜の笑顔は強張る。

(……また、これなのね)

ここは、田中に指定された会社近くのファミリーレストラン。夕方なので店内は学校帰りの学生たちで賑^{にぎ}わっている。スーツ姿のサラリーマンは数えるほどのそこで、田中は目立っていた。

陽菜は仕事の話だと思ったから呼び出しに応じたのに、突然の告白である。

「その、お互いにいい年齢ですし、可能であれば将来を見据えたお付き合いをしたいな、と……」

田中がやけに決意に満ちた瞳で見つめてくる。

百歩譲って「仕事の用事」と偽^{いつわ}ったのはいいとしても、場所を考えてほしかった。

ひきつる頬をなんとか堪^{こら}えて笑みを浮かべたまま、陽菜は毅然^{きぜん}と言い放つ。

「ごめんささい」

すると田中は見ているこちらが申し訳なくなるくらい、悲しそうに眉を下げた。

「えっと、それはダメ、ということでしょうか」

「……はい」

陽菜は深く頭を下げる。

「申し訳ありませんが、田中さんとお付き合いすることはできません」

「あは、あはは……そうですね、僕なんかじゃ朝来さんに相応^{ふさわ}しくありませんよね」

「いえ、そんなことはっ！」

相応^{ふさわ}しいとか、相応^{ふさわ}しくないとか、そういう話ではないのだ。そう説明する前に、田中は自分で結論を出してしまう。

「いいんです。そもそも、僕みたいな男があなたのような女性に告白すること自体、間違^{まちが}ってました」

「あのですね、田中さん、ですから——」

「僕なんか地味だし、これといった特技もないですから……。趣味と言ったら漫画を読むくらいです。朝来さんはプライベートで漫画なんて読まないでしょう？」

そんなことありません、という陽菜の言葉は、落ち込む田中には聞こえていないようだ。会社の一部の人間からも「朝来さん、少女漫画とか全然興味なさそう」とか、「経済誌や新聞を読んでいるイメージしかない」なんて言われることがあるけれど、とんでもない。陽菜は漫画好きで、少女漫画雑誌を定期購読しているほどだ。

きつい見た目のせいかな、男に興味がない、仕事一筋の女性と思われているらしいが、

陽菜の中身はいたって平凡だった。

料理とお菓子作りが大好きだし、休日はゴロゴロして昼過ぎまで眠っていることもある。

そして、本当は恋愛に対して人並み以上に興味があった。

なぜなら二十八年間の人生で恋人がいたのは、大学時代に一人だけ。それも付き合い期間はたったの三か月間だ。

それでも、陽菜の外見だけを気に入ってしてくれる男性とは付き合う気になれない。

「朝来さんなら、頼れると思っただけだなあ……」

なぜなら、彼らは超草食系男子、もとい陽菜に頼りたい「調教されたい系」男子だからだ。唯一、大学時代に付き合っていた彼は違ったが、なよなよした女は苦手だと公言する類の男性だった。

「あの、本当に田中さんがどうというお話ではないんです。漫画は私も好きですよ」

「それじゃあ、理由をお聞きしても……?」

田中と——否、彼のような男性となぜ付き合い合えないのか。それを正直に伝えることは、陽菜にはできなかつた。

どうせ、素直な気持ちを告げたとところで、信じてもらえないのだ。

陽菜は、何度使ったか分からない常套句を口にする。

「……今は仕事が楽しくて、誰かとお付き合いする気になれないんです」

(私には誰かを調教したり、女王様になるような趣味はないんです)

——なんて、馬鹿正直に言えるわけがない。

本音を言えば、男らしい人がタイプだ。

「だから、ごめんなさい」

陽菜は静かに頭を下げた。



田中を残してファミレスを出た後、陽菜は会社に戻った。

株式会社花霞はながすみ。それが、陽菜の勤める会社だ。老舗ジュエリー販売会社である、その会社の商品企画部に陽菜は所属していた。

主な業務内容は、新たな商品の企画とその販売戦略を考えることだ。関係各所と連携して生産ラインを整えたり、広報の役割を果たしたりすることもある。華やかな印象とは裏腹に、山積する地味な事務作業をこなす部署だ。

特にここ一か月の忙しさは例年を超えていた。

花霞は来年の秋で創業五十周年を迎える。それを記念して、新ブランドの立ち上げが

検討されており、社内での企画コンペが開催されることになっているのだ。

陽菜は現在、この企画に全力を注いでいた。とはいえ、今のところいくつもの案が浮かんで消えている。どれも自分の中で「これ！」といった決定的な何か、言うなれば芯のようなものが足りない気がするのだ。

中々良い案が浮かばず、焦りを感じ始めているのに、今日、もう一つ、焦りを感じ始める事柄ができた。

(……私もそろそろ真剣に考えたほうがいいのかしら)

『将来を見据えたお付き合い』

田中は確かにそう言っていた。

気付けば陽菜も二十八歳。入社から早六年以上が経とうとしている。

同期や先輩が恋愛に励んでいたその時間を仕事に費やした陽菜は、今や主任となっていた。

年齢からすると中々の出世らしい。

代わりに、「水曜日の彼」以外の楽しみといえば、ジムと帰宅後のビールだけだった。

自分なりに独身生活を謳歌しているつもりだったが、これではいけないのかもしれない。

現に、ここ一、二年は結婚式に呼ばれることがぐっと増えている。それに加えて、

二十六歳を過ぎたあたりから告白の際に「将来を見据えて」の言葉が使われることが多くなった。

(あれ、もしかして私……のんびりしすぎ?)

ピタリとキーボードをタイピングする指が止まる。

そればかりが気になり陽菜は結局、その日の仕事はそこで終わりにして帰宅した。

翌日。

「ひーなさんっ!」

陽菜に声をかけてきたのは、四歳年の離れた後輩社員——小宮絵里だった。

「小宮さん、仕事中の名前呼びはダメよ。いつも言ってるでしょう?」

「残念でした。ちょうど今お昼休みになりましたよ。ランチ、行きましょ?」

苦笑交じりに小言を言うと、小宮はにっこり笑みを返す。

(まったく、ああ言えはこう言うんだから)

しかしそんなところも可愛いと思ってしまうのは、彼女が、陽菜が初めて持った部下だからだ。ちなみに小宮は見た目も仕事も実に可愛らしい。緩く巻いた茶色の髪に流行りのメイク。百五センチの小宮と百七センチの陽菜が並ぶとまるで子供と大人だ。

「ごめんね。まだやりたい仕事が残っているから、今日はデスクで簡単に済ませるわ」

いつもの陽菜なら小宮の誘いに乗るところだが、あいにく今日はそんな気分になれなかった。

昨日の田中の告白が尾をひいている。告白は振るほうだって気力を消耗するのだ。「ダメですよ、ちゃんと食べなきゃ。それに『休憩をしつかりとるのも仕事のうち』って教えてくれたのは陽菜さんですよ?」

確かにそう言った。間違いない。

陽菜が思わぬ切り返しに言葉を詰まらせていると、小宮は更に続ける。

「それに、聞きたいことがあるんです」

「聞きたいこと?」

「昨日、ファミレスで田中さんと一緒にいらっしやいまし——」

「わーっ!」

「ファミレス」と「田中」。その二つのキーワードに陽菜はすぐさま立ち上がり、大きな声で小宮を遮った。

「絵里ちゃん待って、ストップ!」

フロアに残っていた社員の視線が集まる。

陽菜は、こほん、とわざとらしく咳払いをした。名前呼びはダメと注意したばかりなのに、自分が呼んでしまった。

「絵里ちゃ——じゃなくて、小宮さん」

陽菜は頬を引きつらせたまま小宮と向き合った。

「やっぱりランチ、行きましようか」

後輩は可愛らしい笑顔で、「はい!」と元気よく返事したのだった。

二人は会社から歩いて数分の喫茶店に入った。陽菜がさあどうしたものかと考えていると、小宮にさっさと話を切り出される。

「それで陽菜さん、やっぱり田中さんを振っちゃったんですか?」

「……昨日、あのお店にいたなら聞かしていいんじゃないの?」

「はい。田中さんが陽菜さんに告白したところまでは聞いていました。それ以上は失礼かと思って、お化粧室に行つて戻ってきたら、もの凄く凹んだ顔をして帰る田中さんとすれ違ったんです。ああ、陽菜さんまた振っちゃったのかあ、と」

基本的にノリが軽くて陽菜に対しても気安い態度の小宮だが、彼女は業務とプライベートの切り替えが実に上手だ。そんな小宮が昨日のことを言いふらすとは微塵も思っていない。

それでも陽菜はどうごまかすかばかりを考えている。

「陽菜さん、やっぱり草食系男子が苦手なんですかね」

「そんなことないわよ?」

小宮は、「またまたあ」と可愛らしく肩をすくめる。

「じゃあどうして田中さんがダメなんですか? 陽菜さん、今彼氏いませんか?」

「……え、ええ」

今、どころか恋人なんてもう何年もいない。

更に言えば過去にもたった一人だけ。

——恋愛の話は、苦手だ。

小宮を始め女性社員は恋バナが大好きだが、陽菜はいつも聞き役に徹している。自分のことを聞かれた時は「忙しいから」「仕事が楽しいのよ」と笑顔でかわしていた。

入社以来、ずっとそれで乗り切ってきたのに。

「田中さん、確かにぱっと見は味味だけど優しそうだし、大手広告代理店勤務ですよ? かなりの好条件だと思いますけど……。草食系でもいいと思うのになあ」

珍しく小宮はくいさがる。

彼女の言いたいことはとてもよく分かった。陽菜だって彼が草食系だから断ったのではない。しかし彼は、ただの草食系ではなかったのだ。

——調教してほしいって言われたの……

(そんなこと、言えないわ)

いや、正しくは「調教」と言いかけただけではあるが。

個人的なお付き合いはお断りしたが、彼は大事な取引先の社員。今後、小宮と仕事する可能性は大いにある。迂闊なことを言ってしまうと変な印象を与えては田中にも失礼だ。

陽菜は昨日の田中同様、小宮に対しても使い慣れた言い訳をした。

「今はお仕事が楽しいから、恋人を作る気にはなれないの」
常套句じょうとうくにもかかわらず自分の中に違和感が残る。

本当は恋愛に興味があるし、恋人もほしい。

ところが悲しいことに、陽菜に興味を持つてくれる人は特殊すぎるのだ。

「陽菜さん、甘い! そんなこと言ったら、あつという間におばあさんになっちゃいますよ!」

しかし、陽菜の気持ちが分かるはずもない小宮は、更に追い打ちをかけた。

「そんな、おおげさよ」

「そんなことないです。陽菜さんだって前に言ってたじゃないですか。働き始めると一年なんてあつという間に過ぎちゃうって。私それ、最近凄く実感してるんです」

「あなたが実感するには早いんじゃない? だってまだ二十四歳でしょう?」

「まだ」だけどもう二十四歳です。本格的に婚活を始めようとしたら、私より若い人、たくさんいますもん」

「婚活って……絵里ちゃん、確か彼氏がいたわよね？」

「別れました」

「あら、でもこの間、二人で温泉旅行に行っただってお土産みやげくれなかった？」

「そんなこともありましたね。……他に好きな人ができたそうです。ちなみに二か月ほど、二股されていました。同じ温泉に、私より先にその子と行っていたみたいなんですよ。しかも浮気相手は私の親友。あ、違った。『元』親友です」

「——最低ね」

陽菜は基本的に人の恋愛に立ち入らない。何かを言えるほどの経験がないため、適切な言葉が浮かばないのだ。

それでもこれくらいは分かる。

親友と浮気なんて、彼女をバカにするにもほどがあった。

「別れて正解よ。……うん、婚活、いいじゃない。そういう場で探すのも悪くないと思うわよ」

「本当にそう思います？」

「もちろん」

大丈夫。絵里ちゃんなら、きっといい人が見つかるわ——そう陽菜が言いかけた時だった。

「なら陽菜さん。コレ、行きませんか？」

小宮はスマホの画面をこちらへ向ける。その画面を見た陽菜は、目を見開いた。

「——これ、婚活パーティーの参加受付メールよね？」

「はい。私が申し込んだやつです。来週土曜日の午後六時から、ホテルのレストランを貸し切りにしてのビュッフェ形式だそうです。なんとレストランはイタリアンで、星付きです！」

男性の参加可能年収ラインや年齢など、小宮は流れるように説明する。

なんでも、普通に生活していたら中々知り合わないだろう男性たちが参加するらしい。それだけで小宮の本気度が伝わってくる。

「『行きませんか？』って、申し込んだのはあなたでしよう？」

「はい。でもその日、友達の結婚式が入っていたのを忘れてて」

「忘れてたって……あなたが？」

仕事でも滅多にミスをしたくない小宮が、そんなうっかりをするなんて信じられない。

しかし話を聞くと、彼女は元カレと別れてすぐに勢いで申し込んでしまったのだという。

「あんな男よりいい人見つけてやる！ って頭に血が上ほっちゃったんです。キャンセルするのはもったいないし……主催者に確認したら、代理参加も可能だって。——だから

陽菜さん。私の代わりに行ってくれませんか？」
 そう言って小宮は凄^{すご}みのある顔で笑ったのだった。



帰宅中のバスの中、片手にスマホを持った陽菜は、小宮から転送されたメールをじつと見つめた。

時刻は午後八時を回ったばかり。水曜日以外は残業が当たり前なので、これでもいつもよりは早い時間帯だ。

この時間の車内は仕事終わりの会社員で混みあっている。当然空^あいている席はなくて、陽菜は入り口の少し後方に立っていた。

本音を言えば座りたいけれど、すし詰め状態になる満員電車に比べればずっといい。

(婚活、かあ)

『「まだ」だけど「もう」二十四歳です』

小宮の言葉を聞いた時、正直なところドキリとした。

そんなことを言ったら陽菜なんてアラサーだ。

三十代になるのが嫌なわけではない。職場には四十を過ぎても輝いている先輩がたく

さんいる。

(でも、恋愛初心者のアラサーとは違うのよね)

——恋がしたい。

恋は、女性を美しくする。可愛らしい子はよりいっそう華やかになるし、あまり垢^{あか}ぬけていなかった子もキラリと光り始めるのだ。そんな女性を見る度に陽菜は「いいなあ」と思う。

しかしいざ自分に置き換えると、「また見た目で判断されたら」と考え、気^き後^おれしてしまうのだ。

社会人になって二、三年目くらいまでは、誘われた合コンに顔を出すこともあったけれど、陽菜を「いい」と言ってくれるのは外見を気にいる人ばかり。

いつしか諦めの境地になっていた。

陽菜はもう一度、メールに視線を落とす。突然のお誘いは保留にしてあるものの、もしかしたらこれがきっかけになるかもしれない。

男性はいずれも好条件な人たちだというが、陽菜は、恋人に必要以上のお金や学歴を求めているなかった。条件は、陽菜を見た目で「頼れる女王様キャラ」と判断しない人。

少し我儘^{わがまま}を言えば、男らしく自分を導いてくれる人がいい。

更に夢を見ていいのなら——

「——あの人が、恋人だったら）
 そう想像した時、バスが停車した。数人が降りると一気に乗客が乗り込んでくる。気になっていいるあの男性が乗ってくるバス停だ。乗客の中に彼がいればいいのと思いつつ、水曜日あの時間帯ではないので無理だろうと、陽菜は視線を再びスマホへ向けようとした。

その時、視界の端に一人の男性の影が映る。

「あっ……！」

突然声を上げてしまい、乗客の数人が驚いたように陽菜を見た。しかし陽菜にそんなことを気にする余裕はなく、視線をただ一点に——あの男性へ向ける。

抜群に整った顔立ちの彼は、混みあう車内の流れにそって乗り込んできた。

そしてなんと、固まる陽菜の隣に立ったのだ。

会えるはずがないと思っていた人。今さっき「恋人だったら」と想像したばかりの人が、すぐ側そばにいる。

（嘘、でしょう……？）

その現実を受け止めた瞬間、陽菜の心臓は未だかつてないくらいに激しく高鳴った。鼓動が体の芯から響いている気がする。

（ど、どうしよう？）

陽菜の頭の中はそれでいっぱいだ。

ただ見ているだけで満足だった憧れの人が、肩が触れ合うほど近くにいる。

見ているだけの時は数分間がとも短い気がしたのに、今はとても長く感じた。窓の外を通り過ぎる見慣れた景色も、車内の雑音も、全てが遠ざかり、切り離されたような感覚おぼえに陥る。

陽菜の全神経は、ほんの数センチ隣の彼へ注がれていた。けれど、顔は上げることができず、ずっと俯うつむいたままだ。

今時初恋を知ったばかりの小学生でも、こんな反応はしないだろう。

その時、不意に足元が揺れた。バスがカーブを曲がったのだ。

陽菜はバランスを崩した。ヒールが床を滑って、上半身が後ろに傾く。

「——っと」

その時、大きな手のひらがそっと、陽菜の腰を支えた。

「……大丈夫ですか？」

あの男性が助けてくれたのだ。

彼が触れていたのは、陽菜が体勢を整えるまでの間だけ。はっと隣そばを仰ぎ見る頃には、男性の手はつり革へ戻っていた。

ほんの一瞬の出来事。しかし確かに彼は、陽菜を支えてくれた。

「あ、ありがとうございます」

突然のことにぼかんとしながらも、陽菜はどうかにか礼を言う。

「どういたしまして」

男性は柔らかに微笑んだ。

その破壊力たるや、凄まじい。

初めて間近に聞く声は、想像より少し低く掠れている。何より、やけに色っぽく陽菜の耳を直撃した。腰が砕けそうとはこのことだ。

「もしかしてこれはチャンスなのは」と、陽菜は思った。

(話しかけても、変に思われないかしら)

——ありがとうございます。実は、何度かバスで一緒にいるんです。

いきなりそんなことを言ったら、妙な女だと思われたいだろうか。

でも、こんなチャンスはこの先二度とないかもしれない。

陽菜は彼に声をかけようと視線を上げる。しかし、すぐに後悔した。

彼は、ある一点を見つめていたのだ。視線の先は、なんの変哲もない化粧品車の内広告。だが、その中で一つ目を引くものがある。

新作のルージュを手微笑む女性——今十代の若者の間で絶大な人気を誇るモデルの美波だ。

ふわふわとなびく茶色の髪、柔らかな微笑みを湛える顔は、この世の「可愛い」の全てを体現している。

同性の陽菜でも守ってあげたいと思うほど庇護欲をそそる可憐な容姿。それは陽菜の外見の対極に位置するものだ。

美波を見つめる男性の視線はとても優しい。

その表情は今まで見てきたどんな彼よりも柔らかく見えた。

まるで恋人を見るようなその視線に、陽菜の中にもやもやが広がっていく。

(……ああいう女性が好きなのかしら)

高鳴っていた鼓動がずっと引いていった。

彼は悪いことなんて何もしていない。それなのに心が冷えてしまい、傷つけられた気持ちになる。

自分ひとりだけが浮かれていたことを陽菜は、途端に恥ずかしく思った。

自宅最寄りのバス停につくまでずっと隣を見られなくなる。

それから数日、陽菜の頭にはあのモデルの笑顔がちらついて離れなかった。



「あんた、ばか？」

その週の金曜日の夜。久しぶりに食事をしようと待ち合わせた親友の佐倉胡桃は、一連の話を聞くなりそう言い切った。

「『何度か同じ時間のバスでお見かけしたことがあります』くらい、なんて言わないのよ。せつかくバス王子が隣に来たっていうのに！」

バス王子——あまりに安直な名前に陽菜は突っ込みたかったが、胡桃は止まらない。

「その時話しかけないで、いつ話しかけるの！ 見ているだけで満足って、小学生でももっと進んでるわよ」

「……あのね、胡桃。人には分かっているもできないことが……」

「そう言い続けて、もう二十八歳でしょうが」

胡桃の言葉は正論すぎて、陽菜はぐうの音も出ない。

「それに、芸能人と比べて凹くぼんでどうするの。大体、美波と陽菜は全然タイプが違うじゃない。比べるだけ無駄。あんたの魅力は可愛らしさにはないでしょ。いい加減自覚しなさいよ」

テーブルに片ひじをついた胡桃は、左手でカクテルを揺らしながら「まったくもう」と呆れたようにため息をつく。

あまり行儀がいいとは言えないが、お酒で薄うすらと頬を染めた彼女は、陽菜でさえドキッとするほど色っぽい。

透けるように真っ白な肌に、ぱつちりと大きな目、ふわふわと緩ゆるく巻いた髪。胡桃もまた「可愛い」を体現する女性だ。

しかも実家は誰もが知っている製菓会社を経営している。

そんな超お嬢様である胡桃は、良くも悪くも裏表のない人間だ。好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。異性の好みも同様で、彼女の恋人に対する第一条件は「顔」である。第二条件は「一般常識を持っている」ことだった。見た目も中身も、異性関係ですら彼女は陽菜と正反対のタイプだ。

だからだろうか、高校で知り合ってから、妙に馬が合った。

「胡桃ならそうするでしょうけど、会えるとは思っていなかったから驚いてそれどころじゃなかったの。仕方ないと思わない？」

「思わないわね。私なら気になった段階で話しかけているもの」

「私も話しかけようとしたわ。ただ……怖おそ気付いてしまって。熱心に見ていた相手は超人気モデル、こっちは恋愛初心者のアラサーよ？」

「そんなド派手な顔で恋愛には小心者、なんて意外よねー。陽菜、会社ではクールなバリキャリで通してるとんではしょ？ ギャップ萌えでも狙ってるの？」

「……そんなの狙う余裕があれば、今頃恋人がいたでしょうね」

「確かに。自分のことよく分かっているじゃない。高校の時みたいに会社でも後輩の女の子にきゃーきゃー言われてるとんではしょ。どうせなら男の一人や二人、はべらせてみないよ」

「慕ってくれる子はいるけど、きゃーきゃーなんて言われてないわ。……なんだか胡桃、今日はずいぶんと毒舌ね」

「そう？ いつものことでしょ。大体ね、美波は確かに可愛いけど、大人の色気で勝負すればいいじゃない。まあ、いいわ。それより、後輩ちゃんに婚活パーティーに誘われたんだって？」

「そうなの。これ、胡桃の会社が主催しているものだったって本当？」

胡桃は自ら会社を立ち上げ、婚活コンサルタントとして活躍しているのだ。

陽菜がスマホの画面を見せると、胡桃は「ああ」と目を瞬かせた。

「私の企画だわ。へえ、後輩ちゃんもいいところに目をつけるじゃない。今回の参加男性はかなりレベルが高いわよ。個人的にもとってもおすすめ。というか、私も陽菜を誘おうと思ってたの」

「私を？」

「そう。この企画、どちらかと言えば婚活初心者向けに作ってるのよ。流れは一般的なもので、最初は全員と数分ずつ会話をして、次はフリータイム。最後にカップリングの発表。それだけだと何も面白くないから、料理と会場に力を入れたわ。カップルになれなくても舌を絶対に満たせるってわけ。もちろん気に入った人がいれば、ホテルに泊まるのもありよ」

「一夜限りの恋ってこと？」

「あら、『そんなの、はしたない！』とでも言うつもり？」

「そうは言わないけど、会ったその日に、なんて私にはハードルが高すぎるわ。それに、合コンって苦手で……」

「じゃあ、あんた、ずっとそのままでもいいの？」

胡桃はすっと目を細める。

「気になる人がいても声をかけられない、そんな中途半端な状態で。確かに変態男しか寄ってこないのは同情するけど、仕方ないって諦めるのは怠惰よ。恋人が欲しいなら、自分から動かなきや」

その言葉は陽菜の心に突き刺さった。

中途半端。確かにそのとおりだ。仕事とちょっと特殊な人に好かれる性質を理由に、

流されるように過ごして早六年。仕事は順調だけど、プライベートはずっと停滞したままだ。

そう遠くない未来、後輩にどんどん先を越されるだろう。

気になった人の隣に立つだけでドキドキしてしまい何もできない、自分。

嫌だ、とすぐに思った。

「胡桃。私、行くわ」

小宮と胡桃、偶然にも二人から同じイベントに誘われた。これはきつと今動くべきだ、というお告げなのだ。

「洋服とメイク、もう一度教えてくれる？」

陽菜は胡桃に頼む。

「今日の飲み代で引き受けてあげる。楽しみにしてなさい、会場で一番の美女にしてみせるわ」

親友は、にっこりと笑ったのだった。



一週間後の土曜日。

婚活パーティー会場であるホテルに着いた陽菜は、イタリアンレストランがある二十二階へ向かった。エントランスホールを通り抜けエレベーターに乗り込んだ途端、どんどん心臓の鼓動が速くなっていく。

主催者の胡桃は先に会場入りしているため、陽菜は一人だ。一人で行動するのは、仕事でももちろんプライベートでも慣れているのに、なんだか心もとない気がした。

その理由は多分、胡桃がいないからだけではない。

(この格好で大丈夫……よね?)

陽菜は、今、胡桃の選んだ勝負服を着ている。

センスのいい彼女が似合うと言ったものはきつと、陽菜に合っているはずだ。

ページュのロングコートの首筋と袖口には、柔らかなファーが愛らしくついている。

そして肝心のコートの下は――

陽菜がコートの裾をきゅっと握ったその時、エレベーターが二十二階に到着した。

雑誌にもしばしば登場する有名シェフが料理長を務めるレストラン。そこを貸し切りとは、胡桃の力の入れようがうかがえる。

ドキドキしながらレストランに入り受付を済ませると、スタッフが簡単に今日の流れを説明してくれた。

大体は、事前に胡桃から聞いていたとおりで、受付を済ませた後は、開始時刻までプ

ロワイールカードを書いて待つ。カードには氏名と職業、趣味を書く欄があるものの、名前は仮名でもいいと言われた。ナンバープレートが配られ、その番号に基づいたテーブルに向かえばいいらしい。

パーティーがスタートすると、各テーブルを男性側が動き、女性参加者と数分間会話をするのだ。そしてその後はフリータイム。最後は気になった異性を三人番号で指名し、カップリング発表タイムとなる。

(確かにこれなら、初心者の中でも参加しやすいわね)

プロワイールカードに視線を落としていると、「朝来様」と呼ばれた。

「コートをお預かりいたします」

受付の男性スタッフがにこやかに手を差し出し出している。

「脱がなきゃ、ダメですよね?」

自分の格好を思い返した陽菜は咄嗟とまにそう言ってしまった。けれどすぐに「なんでもありません!」とごまかす。スタッフは、陽菜の言葉に少し驚いたようだが、何事もなかったみたいに微笑んだ。

「会場は空調も効いていますし、寒いということはないかと存じます。万が一、気にならうでしたら遠慮なくおっしゃって下さい」

「……はい、ありがとうございます」

その完璧な応対に観念して、陽菜はコートをスタッフへ預けた。

途端に、暖かな空気が素肌をさらりと撫なぜる。

今、陽菜は胡桃の全面プロデュースによる衣装を身につけていた。

親友が選んだのは、普段の陽菜なら絶対に手にしない、胸元がざっくりV字型に開いた黒のニットワンピースだ。膝下丈のそれは体のラインにフィットし、陽菜の肉体を際立たせる。背中の部分は編み込みになっていて、歩く度に紐の先端がふわりと揺れた。胸元には自社製品である一粒ダイヤのネックレスが輝いている。

陽菜の仕上がりを見た親友が満足そうに微笑んだので、普段はしない格好に戸惑っていた陽菜も中々いいのではないか、なんて思ったりした。しかしいざ会場に来てみると、すーすーした感覚が落ち着かない。もしかして自分だけ気合を入れすぎてしまったのでは、なんて考えてしまう。

その証拠に、受付を終えて指定されたテーブルに向かう僅わずかな間にも、陽菜は、会場にいた他の参加者の視線を感じた。意識すると更に落ち着かなくなりそうで、陽菜はあえて全てを無視し、前を見る。その間も心臓はドクドクと早鐘を打っていた。

(目立ってる……?)

その時、ポン、と後ろから肩を叩かれた。

「ひゃっ!」

素肌に触れた手に、弾かれたように振り返ると、胡桃が笑っている。「やっと来た。中々姿が見えないから、怖気付いたのかと思ったわ」

「胡桃！」

見慣れた姿に陽菜は一気に安堵した。

胡桃は、普段の華やかな私服とは打って変わってシンプルなダークスーツを着ている。主催者なので気を使っているのだろう。

「陽菜、挙動不審になってるわよ。目立つから少し落ち着きなさい。それに顔が引きつってる、緊張しすぎね」

「緊張もするわ。こういうのは久しぶりなんだから」

「大丈夫よ。会話に詰まったら、仕事相手だと思えばいいわ。全く興味がない相手なら大根と同じでしょ」

「大根って……でも、確かにそれなら大丈夫かも」

そう答える陽菜の全身を眺め、胡桃は改めて満足そうに頷いた。

「いいじゃない。その服やっぱり似合ってる。——って何よ、その顔。私のセンスに文句でもあるの？」

「違いわ。ただ、視線を感じるの。露出度が高すぎじゃないかしら」

「それは……まあいいわ、今は自覚しなくても」

「胡桃？」

「他の参加者を見てみなさい、陽菜より肌を出している女性はいっぱいいるわ」

陽菜はさっと会場内を見回す。なるほど、先ほどまでは緊張で見えていなかったけれど、確かに陽菜以上にセクシーな格好の女性がちらほらいた。

ほととすると同時に、自意識過剰だったかも、と恥ずかしくなる。

「——ほら、そろそろ始まるから行きなさい。楽しんでね」

胡桃にぼんと背中を押され、陽菜は指定されたテーブルに向かった。

会話に困ったら仕事相手だと思えばいいとは、確かにベストなアドバイスだ。自己紹介タイムを終えた陽菜はそう実感していた。

ジュエリー販売会社の商品企画部に所属する陽菜は、普通の会社員では出会えないタイプの様々な異性と接する機会がある。それこそ目の覚めるような美形芸能人から、職人まで。

そのせいか陽菜はあまり緊張せずに対応することができた。

今回の参加者は、男女それぞれ二十名ずつの計四十人。

男性側は欠席か遅刻かは分からないが、予定より一人少ないものの、胡桃が太鼓判を押しだけあって、会社経営者、医師、弁護士……と俗にいう超高学歴な面々が集まって

いる。
 仕事の時ほどバラエティに富んではいけないものの、全員スマートな態度で、会話中も手に持ったグラスが空になると、好みを聞いてすぐに新しい飲みものを持ってきてくれた。

会場内をゆったりと流れるジャズも、参加者の華やかな装いも、全てが大人な雰囲気だ。

陽菜の知っている合コンでは、やけに男性がガツガツしているものだったから、この雰囲気は意外だった。

中には何人かいいな、と思える男性もいる。だから、陽菜は油断してしまった。

パーティー開始から約一時間、フリータイムが始まってすぐ、陽菜は困惑していた。

「へえ、企画の仕事をしてるんだ。確かに、凄く仕事ができそうだね。自立した女って感じで」

「……ありがとうございます」

開業医をしているという男性が、フリータイム早々陽菜のもとにやって来たのだ。以降、彼はずっとこの調子で陽菜にまわりついている。

「この仕事をしていると色んな女性が擦り寄ってくるけど、やっぱり金目当ての女が多いんだよね。初対面で年収を聞いてきたり、やたらベタベタ触ってきたり。それって俺

の職業に群がっているだけで、俺自身を見てないじゃない？ そういうの、いい加減うんざりだよ」

彼はベラベラと自分のことだけを話す。

「その点、君みたいに自立した人はいいよね。下手な男なんかよりよっぽど稼いでそうだ」
 まあ、流石に俺には及ばないだろうけれど、と言葉の最後に自分を上げることがを忘れない。

(……この人、苦手だわ)

陽菜は顔に愛想笑いを貼り付けた。

悪い人ではないのだと思う。しかし自分のことが大好きすぎるように感じるのだ。

一通り自分のことを話し終えた男性は、「それで」と初めて陽菜に質問してくる。

「朝来さんはどうしてこのイベントに参加したの？ あなたほど綺麗なら、男なんてやりどりみどりでしょうに」

「そんなことありませんよ。私が仕事ばかりで寂しい生活をしているのを見かねて、友人が誘ってくれたんです」

「またまた、そんな謙遜はいらないよ。きつと男に対する理想が高いんでしょう？」

理想——は、陽菜を外見だけで判断しない人。

それを理想が高いと言われてしまうのなら、陽菜はきつとこの先もずっと独身だ。

そんな未来が嫌で恋愛を楽しもうと思ったからこそ、このイベントに参加したのに。「でもあなたはそれでいいと思うよ。変に媚びる女よりもよっぽどいい。それに、こちらの男よりもよほど強そうだ」

強そう。その言葉も何度も言われた。

（あなたが私の何を知っているの？）
今や陽菜は疲れを感じていた。これが仕事なら我慢できる。しかしそうではない以上、この人と会話を続けようとは思えなかった。

だが、男性は止まらない。

「俺はそういう女性がいいな。どう、連絡先を交換しない？」

これは、明らかなルール違反だ。お互いの連絡先は、カップリングが成立して初めて交換することになっている。

だから陽菜は失礼がないよう、やんわりとその申し出を断った。

すると男性は笑顔を一変させ、不機嫌そうに顔をしかめつつも言い募る。

「これくらい、主催者も黙認するはずだよ」

この人と連絡先を交換したいとは、陽菜にはとても思えない。

ちらりと会場の隅にいる胡桃を見た。けれど彼女は忙しそうに他のスタッフとやりとりをしている。親友の企画を台無しにするような真似はしたくなかったので、陽菜は改

めてやんわりと断った。

「……申し訳ないのですが、今は——」

「ちっ、そういうところが良くないんじゃないの？」

男性は不機嫌な様子を隠そうともせず舌打ちをすると、一歩、陽菜へ詰め寄った。

「どんな男を探しているのか知らないけど、そんなにお高くとまってるからモテないんだよ。おかしいと思っただ。君みたいな女が婚活パーティーなんて。サクラかとも考えたけど、その性格じゃ恋人がいらないのも頷けるね」

陽菜は咄嗟に言葉を返せなかった。

連絡先を教えなかっただけで、ここまで言われるなんて。

そんな陽菜の様子に多少溜飲（りゅうこん）が下がったのか、男性はシャンパングラスを片手ににんまりと笑う。

「どう？ 教える気になった？」

（そんなこと言う人に、教えるわけじゃないじゃない！）

いくら恋愛下手だって、こんな男はまっぴらごめん。呆れた陽菜はその場を離れようとする。しかしあるうことか、男性は陽菜の手を握って引き止めた。

「なっ……!?!」

「返事、聞いてないよ？」

ぞくり、と陽菜の背筋に悪寒が走る。さすがにこれは、ない。陽菜はそれまで浮かべていた笑みを消して、手を振り払おうとする。そこに、さっと一人の男性が割り込んできた。

「失礼」

凜とした声が陽菜の耳に飛び込む。

「先ほど、こちらを落としませんでしたか？」

彼はハンカチを差し出し、そう陽菜に問いかけた。

陽菜は何も言えなかった。彼の背後で医者だというあの男性が不快そうに抗議しているけれど、その声はやけに遠い。

（嘘、でしょう……？）

声をかけてきた男性が白いハンカチを陽菜に手渡そうとする。

「なんだ、君は!？」

不意に医師の男性がくいつとその人の肩を引いた。すると彼は「おっと」とやけに大袈裟に体を傾ける。その拍子にグラスの中身が少しだけハンカチにかかった。

それは、どこから見ても陽菜の持ち物ではない。それなのに彼は陽菜の肩をたたく。

「大変だ、すぐに汚れを落とさないと。申し訳ありませんが、一緒に来ていただけますか？」

彼は陽菜だけに見えるようにウイंकをした。

——話を合わせて。

そう、言っている気がする。

「はい！」

陽菜の返事にその人は満足そうに小さく頷き、腰にそっと手を添えてくる。そのまま陽菜を伴って歩き始めた。けれど、医師の彼が「おい！」と二人を止める。

「あなたは振り返らないでいい、俺に任せて」

そう、彼は陽菜の耳元で囁き、振り返った。

「何か？」

その時、彼がどんな表情をしていたか、陽菜には分からない。しかし医師は「ひっ」と引きつった声を出した。

「お話がないなら、失礼してもよろしいですか？」

彼の言葉に、それまでの勢いが嘘だったかのように医師が身を引く。

「行きましょう」

彼に連れられた陽菜はレストランを出る。そして店から出た直後、腰に添えられていた手は離れた。まるで、あの日のバスと同じ……

陽菜を助けてくれた男性は、あのバスの彼だったのだ。

(本当に……?)

嘘、どうして、信じられない。そんな心の声が陽菜の頭の中を一気にかけめぐる。

「大丈夫？」

陽菜はろくに返事もできず、ただ、彼に視線を奪われていた。

触れられていた腰がまだ熱を持っている気がする。

バスの車内で横に並ぶのではない。正面の、すぐ目の前にあの人の顔がある。

それはまるで白昼夢はくちゅうむのようで、陽菜はひたすら惚ぼけてしまった。彼はその様子を違う意味に捉とらえたらしい。

「あまり酔っているふうには見えなかったけど、本当は気持ち悪い？」

「え……？」

「それとも連れ出されて嫌だった……とか？」

彼は少しだけ悲しそうに眉を下げる。

——可愛い。

瞬間的にそう思った。

彼はもともと優しい顔立ちをしているが、その表情に、陽菜自身も意識したことになかった母性が大いに擦すくられる。

「あなたが困っているように感じたから、つい。……迷惑でしたら謝ります」

「そんなことはありません！」

思わず大きな声を出してしまい、慌てて口をつぐむ。迷惑だなんて、そんなふうには誤解されるのは嫌だ。

片手をそっと胸にあてて深呼吸をすると、改めて彼と向かい合う。

「……そんなこと、ありません。あなたがおっしゃったとおり困っていたので、その……とても助かりました」

陽菜は感謝の気持ちを含めて深く頭を下げる。

今、自分はどんな顔をしているだろう。真っ赤になっていないだろうか、髪は乱れていないだろうか。そんなことばかり気になってしまふ。

少しでも想いを伝えたくて、陽菜は顔を上げ、できる限りの笑みを浮かべる。

すると彼は一瞬目を見張った後、穏やかに、「なら良かった」と微笑んだのだった。

それはあの日——バスで『どういたしまして』と言った時と同じくらいの破壊力だ。

(やっぱり、若いからかしら)

年下特有の無邪気さ——可愛らしさに加えて、そこはかとなく漂ただよう色気に頭の奥がくらくらす。

「顔、赤いですね。やっぱり酔ってる？」

お願いだから、そんなに優しい笑顔を向けるのはやめてほしい。

あなたに会えて嬉しくて見惚みとれていました、とは言えず、お酒をほとんど口くちにしているのに陽菜は「はい」と頷く。

「……っと、名前も名乗ってなかったですね」

彼は改めて陽菜と向かい合うと、にっこり笑った。

「本郷ほんごうといいます」

「本郷、さん……？」

はい、と頷く姿は、やはりどこことなく可愛らしい。

ずっと気になっていた男性の名前を知ることができて心踊らせていた陽菜は、「良かったら、あなたのお名前をお聞きしても？」と言われてはっとした。

「あっ——」

「あっ。」

慌てて答えようとするものの、舌を嚙んでしまふ。

(ああもう、最悪だわ)

こんな姿、会社の人が見たら驚くに違いない。しかし今の陽菜はキャリアアーマンでも、女王様でもなかった。憧れの人を前にして慌てる、恋愛初心者だ。

「……朝来陽菜です」

恥ずかしさを覚えながら名乗ると、本郷はぱちぱちと目を瞬またたかせた。

「陽菜さん。素敵な名前ですね」

そう、とろけるように微笑む。

「良かったら、抜け出しませんか？」

「え……？」

「スタッフには俺から話してきます。……実は無理に誘われて参加したんですが、乗り気じゃなかった上に遅刻してしまって、今更入りづらいんです。それに、勘違いなら申し訳ありませんが、あなたもあまり楽しそうに見えなかったから」

これは、夢だろうか。

「このホテルの上にバーがあるんです。そこで飲みなおしませんか」

それならどうか、覚めないでほしい。

「——俺とあなた、二人で」

陽菜は夢見心地なまま、その誘いに乗った。



国内の外資系ホテルの中でも最高級ランクに位置するホテルの三十五階。このフロアは、政財界や芸能界といった各界のセレブ御用達だと聞いたことがあった。

一介のOLである陽菜がこのバーに来るのはこれが初めてだ。「ここです。この店の酒はどれも美味しくておすすめなんです。気に入ってくれたら嬉しいな」

本郷が案内したそこは、おしゃれなバーラウンジだった。

エレベーターを降りた瞬間から、陽菜は目の前の光景に圧倒されている。視界一面が夜景の海だ。

さすがは世界的に展開している超高級ホテルのバー、照明やBGMに至るまでとても洗練されている。中央にはグラランドピアノが置かれ、シャンパンゴールドのドレスを纏った女性が軽やかなタッチでジャズを奏でていた。

本郷はさつとカウンター席に向かう。

「さあ、どうぞ」

顔見知りらしいバーテンダーと軽く挨拶を交わし、さりげなく陽菜に椅子を引いた。

陽菜がとまどつていると、彼は二、三度目を瞬かせ、「ソファ席のほうが良かった？」と小首を傾げる。

「いえ、ありがとうございます」

陽菜はどきどきしながら、腰を下ろした。

「どういたしまして」

陽菜に続いて隣に座ると、本郷は「良かった」と小さく言う。

「ソファ席もいいけど、このほうがあなたとゆっくり話せると思うんだ」

さり気ない気遣いに加えてこのセリフ、陽菜は本気で眩暈がしそうになる。

「……私も、あなたとゆっくりお話ししたいです」

バスで見かけた時は、気配りができる柔らかい雰囲気の人だと思っていたが、今の彼はどんな異性よりも「男」を感じさせた。

「陽菜さんみたいな素敵な女性にそう言ってもらえると、俺も嬉しい」

ずっと憧れていた彼が自分の名前を呼んで、褒めてくれている。夢みたいな現実を、

陽菜は嘔みしめた。

「お上手ですね」

上ずらないように声を抑え陽菜が言うのと、本郷は「本心ですよ」とさらりと返す。

彼とこんなふうにならなくて、軽口を叩き合うなんて、胡桃や小宮にはっぱをかけられていたことを思うと、驚くほどの飛躍ぶりだ。

「お酒は好きですか？」

「はい。こんなお酒落なバーに来ることはないの、詳しくはありませんが……」

「大丈夫。このマスターが出すお酒はどれも美味しいから」

「お任せしても？」

立ち読みサンプル はここまで